

次のステップにつなげる この学校の基礎学力のつけ方



「教師が徹底的に教材研究や大学入試の過去問分析を行い、センター試験対策、2次試験対策として必要な学習内容を中1から段階的に与えています。その6年間の集大成が難関大学入試を突破する学力です」と藤田清司校長先生。

70分授業で 中1から6年後の入試を 見据えて指導を行う

ここ最近、東大・京大・国公立大医学部に100名以上の合格者を送り出している同校。ハイレベルな合格実績を築き上げてきたのは、創立以来、変わることのない確かな理念に裏打ちされた教育方針です。

「最終的な大学合格を見据えて、そこから逆算方式でさかのぼっていき、いま何をしなければならぬかということを考えて指導しています」と藤田清司校長先生は、ベ이스となる考え方を話してくださいました。同校では、中高6年間を「2年・

3年・1年」に分けて、2年間で中学の学習内容を終え、高校の内容は3年間かけてじっくり履修、最後の1年間で、入試に必要な教科を重点的に強化するという形式をとっています。

進学校ではごく一般的なシステムですが、同校ならではの特色と言えるのが70分授業です。それも単に時間が長いというのではなく、70分間のうち40分間は教科書内容の定着に用い、残りの30分間はオリジナル教材を使って演習という時間配分で、学習効果が最大限上がる工夫がされています。

「大学入試の過去問を徹底的に分析していけば、中学、高校それぞれの段階で、何をしなければならぬかということが見えてきます。教科書内容の定着を中1から6年間積み上げていくことは、センタ



中1から週1回行われる「宗教」の授業。人生いかに生きるべきか、命の尊さ、愛や平和についての考えをしっかりと身につける。

小テスト、補習で 成績不振の芽は 早期に摘みとる

トップ進学校の名にふさわしい進学実績を誇る同校ですが、授業

1試験対策につながります。さらに、演習で国公立大入試の2次試験を突破するのに必要な読解力・論述力・発想的思考力の質を高めていきます」（藤田校長先生）

教師による綿密な教材研究が、「難関大学合格」という目標から逆算して展開される同校の授業をしっかりと支えています。

進度は決して早くないといえます。公立よりもはるかに多い年間約260日の授業日数を確保することで、じっくりと学力の定着を図っています。

「授業をきちんと受け、毎日コツコツ予習復習をすれば、東大・京大・国公立大学医学部に合格できるカリキュラムになっています」と渡瀬金次郎教頭先生。

基礎学力の定着には、学校での授業だけでなく家庭学習も不可欠ということで、同校では中学生には家庭学習を3時間するように指導しています。また、家庭学習用にオリジナルプリントを課題とし



70分授業は、教科書内容と演習に配分される。徹底した教材研究から作られるオリジナル教材で、中1から読解力、論述力、思考力を磨いていく。



図書室内の自習コーナーは、朝7時から夕方6時まで開放されている。大勢の生徒が授業前や放課後に利用している。

と与えています。たとえば、英語なら中1の5月頃から、英作文プリントでピリオドの打ち方など、英作文の基礎や単語のスペルを正確に書くトレーニングをします。数学では、週末に単元のポリニュームに応じて20〜30題の計算プリントを課題として与えます。いずれも、低学年のうちに学力の基礎となる計算力、英作文力を確実に定着させるのが目的です。英語や数学と違って具体的な予習をするのが難しい国語については、何も準備をせずに授業に臨むことにならないよう、教科書を元に文章を要約させたり、文意を問う内容の予習用プリントを作成、授業もプリントに沿って進められます。これらのプリント課題については、やりっぱなしにならないように教師が必ず目を通していま

次のステップにつなげる

この学校の基礎学力のつけ方

このように、きめ細かに指導をしていても、なかには成績の振るわない生徒も出てきます。その場合も、必ず早期の対処を行っています。



国語・英語・数学で家庭学習用に出されるプリント。計算力・英作文力・読解力・文章力を培う内容が盛り込まれている。

心の教育が 勉強に取り組む姿勢を 自ずと育む

早い段階でのフォローという同校の方針を象徴する取り組みは、中1の3月に実施される3泊4日

「生徒の学力を中間と期末の定期テストだけで測るのは困難です。定期テストで悪い結果が出てからでは遅いので、英語と数学では学年共通で単元の確認テストを行うなど、小テストを頻繁に行って、生徒の理解度を細かくチェックしています。理解が十分でない判断した生徒には放課後補習を行っています」（渡瀬教頭先生）

渡瀬金次郎
教頭先生

難関大学に合格するには総合力が不可欠なので、中1から英語・数学・国語の基礎教科だけでなく、理科・社会も含めて5教科をバランスよく学習するよう指導しています。また、「ただ勉強しなさい」と言うだけでは徹底できないので、「授業までにこれだけのことをやっとなさい」と細かく指示しています。

の高野山学習会宿です。成績下位50人の生徒を対象とするこの合宿では、予習復習の仕方や授業の受け方を再点検すると同時に、「心」の指導を行います。

「本校に入学する生徒の、元々の学力は高いのです。それなのに結果が出せないのは、飽きっぽい、集中力に欠ける、甘い気持ちがあるなど悪い習慣がついているからです。悪い習慣がまだ固まっているい中学段階でそのことを認識させ、そこから新たな自分づくりをさせるのが高野山学習会宿の真の目的です。この合宿を経験した生徒の中から東大、京大、医学部に進学した生徒もいます」（藤田校長先生）

仏教校として週1回の「宗教」の授業と月1回、全校生徒が集まって、父母の恩、衆生の恩、天地の恩、三宝の恩の四恩に感謝を捧げる「感謝祭」を行うなど、宗教的情操教育に力を入れている同校は、ある意味、教科学習以上に心の教育を重視しているようにも見えます。

「勉強だけの人間は世の中で通用しません。勉強ができ、なおかつ人間として豊かな心をもった人づくりが本校のめざすところ。時期がずれると難しくなる心の教育は、中学段階から行うことが大切です。心ができれば自分の未来が見えてきて、逆算思考で未来のために、何をしなければならぬかということがわかってきます。人間としての心ができれば、子どもは自然に勉強します」（藤田校長先生）

中1からの日々の学習の積み重ねと、勉強に向かう姿勢の土台となる心の教育、それが両輪となって、難関大学の合格を勝ち得る学力が培われるのでしょう。